

## ～突撃★ドメーヌ最新情報！！～

### ◆VCN°67 ラ・ビュル・リーブル&ロマン・エナン

#### 生産地方：シャンパーニュ

#### 新着ワイン 2 種類♪

##### 【ラ・ビュル・リーブル】：AC シャンパーニュ ムニエ・デュ・ドー2022（白泡）

ヴァレ・ド・ラ・マルヌ地区にあるピノムニエの銘醸地として名高い Cerseuil（セルスイユ）村。ロマンと弟のトマはこの村に 5ha の畑を所有していて、中でも最も樹齢の古い区画のピノムニエだけを選びすぐって仕込んだのが、この「ムニエ・デュ・ドール」だ。2022 年は日照量に恵まれた当たり年で豊作に恵まれた。だが、冬の剪定段階で房数を厳格に制限しているため、豊作とはいえ収量は 6,000 kg/ha（38 hL/ha）にとどまり、通常のシャンパーニュの自然収量よりも 50%ほど少ない水準だった。醸造面では、一次発酵は全て樽発酵・熟成。二次発酵に用いるショ糖の代わりに、翌年の発酵中の樽の中から最も酵母の勢いがある 5～6 樽を選び、その発酵中のワインに BIO の高濃縮ブドウ果汁を混ぜてリキュール・ド・ティラージュをつくり、ティラージュを行った。出来上がったワインの色調は、ほんのりとピンクを帯びており、ブラン・ド・ノワールの優良年にしばしば見られる Oeil de Perdrix（ヤマウズラの目）を思わせる淡い色合いを呈していて、泡立ちは優しくクリーミーで繊細！味わいは、確かにロマンの言う通り、エキスがピュアで洗練されている一方で、アフターに向かってせり上がるミネラルの塩気と滋味深さが、エネルギッシュな力強い印象を与える！なお、ラ・ビュル・リーブルのシャンパーニュは、ル・ギャマン・デュ・テロワールのスタイル同様に、開けた直後よりも少し時間が経った方が、香りの開きやベースとなるワインの良さが際立ってくる。ロマンのシャンパーニュは、「泡そのものを楽しむ」というよりも「テロワールをじっくり味わってほしい」というコンセプトのため、サービス温度は通常のシャンパーニュよりやや高めの 10℃前後を推奨している。また、彼によると、提供の少し前に抜栓しておくことで、ムニエ・デュ・ドーが本来の持つ味わいの深みやポテンシャルがどんどん開花するとのことだ。ピノムニエ 100%のシャンパーニュのイメージを一変させる、力強くもタイトな構造を備え、口に含むほどに塩味がせり上がる味わい深い一本に仕上がっている！

##### 【ロマン・エナン】：AC シャンパーニュ ル・ギャマン・デュ・テロワール 2022（白泡）

2018 年の鮮烈なデビューを皮切りに、年を追うごとに入手困難な存在へと成長した「ル・ギャマン・デュ・テロワール」。ロマンを象徴するフラッグシップ・キュヴェとして、その世界的な評価は今や揺るぎないものとなっている。パトリック・ブジューから受け継いだ SO<sub>2</sub>無添加・ノンフィルター・ノンドザージュの哲学と、アンリ・ジローから学んだ精度の高い樽発酵・樽熟成の技術を進化させた独自のスタイル。泡の存在そのものを再定義し、ショ糖を一切使わず、代わりに翌年の発酵に勢いのあるジュースを添加し、完全無添加で泡を仕上げている。ヴァレ・ド・ラ・マルヌのテロワールに徹底して向き合い、スティルワインとしての質を第一に据え、泡はあくまで脇役として寄り添うような、クリーンでありながら滋味深くエネルギッシュなシャンパーニュを仕立てる。2022 年は太陽に恵まれた当たり年。収量を初期の剪定段階から抑えることで、ベースとなるワインの凝縮度にこだわった。醸造は、グランクリュ Ay のピノノワール、Cerseuil のヴィエーユ・ヴィーニュのピノムニエ、そしてグランクリュ Chouilly のシャルドネの中から、最も味わいの優れた樽を選抜し、アッサンブラージュした。ティラージュはショ糖の代わりに、翌年の発酵中の樽の中から最も酵母の勢いがある 5～6 樽を選び、その発酵中のワインをリキュール・ド・ティラージュに使用した。出来上がったワインは、泡立ちが新鮮でクリスタルなエキスをフィネスがあり、酒質は上品でありながら、口に含むとせり上がる、塩辛くちょーキーなミネラルがエネルギッシュで飲みごたえ十分！瓶内二次発酵の泡はショ糖ではないため、開けたては香りがやや閉じ気味で、泡にも若さが感じられるものの、少し置いて泡の勢いが落ち着くと、オレンジやコアントローといった柑橘

系の香りが立ち上がり、繊細な泡と深い味わいが織り成す絶妙なハーモニーが姿を表す！ムニエ・テュ・ドーと同様、泡が落ち着くほどにベースとなるワインの良さが際立ってくるので、サービスは 10℃前後のやや高めな温度を保ち、大ぶりのグラスでゆったりと揺らしながら味わいたい一本だ！

### ミレジム情報

2022 年は、冬の寒さが穏やかで雨も適度に降り、畑は十分な水分が蓄えられた状態でスタートした。春の芽吹きはスムーズで、4 月初めに寒波が降りたが深刻な霜害には至らず、ブドウの成長サイクルは順調に進んだ。5 月に入ると気温は上昇し、開花は例年よりも早かった。この時点で生産者の間では収量への期待が高まった。初夏は強い日差しと乾燥が続く、ブドウの成長は一気に加速した。6 月下旬にはまとまった雨が降り、この雨が夏の乾燥を乗り切るための重要な蓄えとなった。7 月は再び暑さが戻り、猛暑と乾燥は 8 月中旬まで続いた。ブドウは途中水不足のストレスにより、成熟にブレーキが掛かったが、幸い、8 月末に適度な雨が降ったことにより再び息を吹き返した。最終的に収穫は例年よりも早いペースで始まり、酸と糖がしっかりと成熟した、品質の高いブドウを収穫することができた。

### 「ヨシ」のつ・ぶ・や・き

2021 年 11 月から 4 年越しの交渉の末、についに正規インポーターとしての取引が実現した新生シャンパーニュ生産者の中で最も注目度の高いロマン・エナン。今回は、ロマンと弟トマが率いる La Bulle Libre のピノムニエ 100% のキュヴェ Meunier tu dors に加え、初取引ということもあり、特別に希少価値の高いロマン・エナンのドメーヌ・シャンパーニュ Le Gamin du Terroir も分けてくれた。

2021 年にロマンと初めて出会ったとき、すでに人気こそあったものの、まだナチュラルワイン好きの一部の愛好家の間で静かに話題になっているような段階だった。それがこの 5 年の間に、みるみるうちに評価が高まり、今や若手の先鋭シャンパーニュ生産者として注目を集め、オークションにも出回るほどの存在となってしまった。



(写真①) ロマンとラ・ビュル・リーブルの醸造カーヴ

経緯はさておき、ロマンのドメーヌがどのような外観で、畑がどのような場所に広がっているのか、その簡単なプロフィールを、写真を通して紹介したいと思う。

(写真①) は La Bulle Libre (ラ・ビュル・リーブル) とロマン・エナンのドメーヌの外観。ドメーヌは Ay 村の中心地に近い場所にあり、2021 年まで父親のパスカル・エナンのシャンパーニュ・メゾンだった。2021 年に父親が息子たちに引き継いで以降、この建物はロマンと弟トマが醸造所兼住居として利用している。そして、ラ・ビュル・リーブルとドメーヌ・ロマン・エナンは、書類上は別会社だが、実際にはこの建物内にある同じ醸造所と熟成カーヴを共有している。

(写真②) 選定方法を熱心に説明するロマン



次に、これはギユイヨ・ブルサールに仕立てられた Ay 村のピノノワールの畑の写真。(写真②) 訪問したのが 2 月なので、ロマンが剪定方法を丁寧に説明しているが、注目すべきはロマンの後ろにある黒いネットが巻かれた樹木。現在ロマンは、「アグロフォレストリー」を実践している。それは、農業と森林を組み合わせ、自然の力で土地を豊かにする栽培システムのこと、桃やアプリコットの果樹をはじめ、メイプルの木や桑、ポプリの木など実を生らさない木なども植樹している。このアグロフォレストリーは、mycorrhizes (ミクロリズ)、つまりブドウの根と共生する菌根菌を増やすことに加え、樹々にコウモリや鳥が集まることによって、ブドウを狙う虫を捕食してくれ、さらに木が日陰をつくり、温暖化による強い直射日光からブドウの木や作業員を守るなど、多くのメリットがあり、生物多様性に富んだ環境が形成される。ロマンはこの植樹を 2022 年から開始しているが、今後はブドウの木の合間に、10 平方メートル間隔で、1ha 当たり 100 本と徐々に本数を増やしていく予定だ。



最後に紹介するのは、バイオディナミを実践しているロマンの畑の土と、除草剤を使用している隣接する畑の土を比較した写真。(写真③)(写真④)(写真⑤)

(写真③)はロマンのピノノワールの畑で、6年間のバイオディナミ実践により表土が黒みを帯びている。実際に鍬で表土を掘り起こしてみると、土はふかふかとしていた。対して、近所にある他の生産者の畑は長年の除草剤使用の影響で表土が白っぽく苔が生えている(写真④)。



(写真③) ロマンのピノの畑。土壌が黒みがかったり (写真④) 近所の畑。土壌が白みがかったり苔も生えている

掘り起こした土をコンクリートの上に置くと、その色の差はさらに明確になる(写真⑤)。足元にあるのがロマンの畑の土で、その隣が除草剤を使用している畑の土だ。見た目だけでも、ロマンの畑の土のほうがはるかに健全であることが分かる。ちなみに、当時 2016 年、畑を手に入れたばかりの頃の土の状態は隣人と全く変わらず、土に生命を感じられなかったそう。だが、バイオディナミを取り入れ、土お越しを毎年行うようになってから、徐々に



(写真⑤) 隣人の畑の土と自社の畑の土を比べるロマン

以上、簡単ではあるがドメーヌの一端を紹介してみた。この最強のチームからは、今後さらに品質が向上していくことしか想像できず、これからの伸びしろが本当に楽しみでならない！

(2026.2.9.ドメーヌ突撃訪問より)

※弊社HP資料にて、カラーでサイズの大きい鮮明な写真をぜひご覧くださいませ